

四万十川は“環境問題の象徴”！ だからここから発信する！ =四万十町十和=

清流通信読者の皆様こんにちは。今回は四万十川中流域四万十町十和から、四万十川を介して、環境問題について発信し続ける“川ちゃん”こと川下徳之さん(49歳)の活動についてお伝えします。

“我、事において後悔せず！”

渡された名刺の肩書きは、“専業主夫”。けれども、川下さんの活動全てを語ろうとすれば、到底、原稿用紙2、3枚(清流通信の分量)では書ききれない。二人のお子さんを逞しく育てるパパであり、ステキなパートナーを“上-カミさん”と呼び尊敬する男性。“四万十を大地をこよなく愛し環境に正しく接することを心がける”というポリシーを掲げ、“四万十川を清流に戻す”ため、ある時はマイ箸づくりの講師になり、“シーまうんと(Sea⇄Mt.)号”という天ぷら油回収車で流域を周り廃油石けんづくりに精を出す。そして小中学校では、未来に向って子ども達に環境問題をレクチャーする…等々。人は彼を四万十川の“川ちゃん”と呼ぶ！

1996年の8月のこと、その頃名古屋に住んでいた川下さんは、四万十川を初めて訪れた。ゆっくりと流れる四万十川、人と自然が調和したこの地が、川下さんを魅了した。“我、事において後悔せず！”を座右の銘とする彼は、その年の暮れに18年間勤めていたNTTを退職し、翌1月中旬には、四万十川の中流域、四万十町十和に移住した。なんと素早い行動！

それから14年。この地で生まれた太陽君とひまわりちゃんを四万十川の自然の中で育てながら、四万十川のほとりから、環境問題について熱く発信をし続ける。

その彼は、マイ箸・マイボトル・マイバック常時携帯は当然のこととし、買い物は無駄な包装を減らすため“タッパー”持参で“タッパー買い”をし…と、自らが先頭に立って行動する。「私一人がやっても何も変わらない」のように無関心が根底にある限り、環境問題は無くならない。ボクは微力でも発信し続ける。それがいつかは現状を変える力になると確信する！しかし、そこに、気負いなどは全く感じられない。「自分の襟を正さないと言えない。だから自分の出来るところから実践し、そして発信する。当然やらねばならないことをしながら伝えているだけ。」自分がやっていることはそういうことなのだ、サラリと言っている。

マイ箸づくりを通じて考える事

唐突な話ではあるが、皆様はサルトリイバラという植物をご存知だろうか？(参照:右写真)関西から西の高知などでは、“柏餅”(シバ餅)の葉っぱとして使われる。このサルトリイバラ、別名を“山帰来(サンキライ)”と言って、根茎にサポニンを含み漢方薬として使われ、その名は、昔病気を患った人が山に捨てられた時、この根を食して元気になり、山から帰ってきたことに由来するという。川下さんはマイ箸を作るとき、この“山帰来”を好んで使う。

「幹はまっすぐではないけれど、だからこそ形がキレイで趣がある。“山帰来”の名前の由来のように、人は都会に出て行くけれども、いずれは“田舎=自然”に帰って来る。だから、この“山帰来”の意味は、山から帰るのでなく、逆に山に帰ると思いたい。」人も自然の一部。その内なる自然が、自らをその故郷に帰すということなのだろうか。今までは、シバ餅の葉っぱとしか見ていなかったサルトリイバラが、何やら“シンボル”のように見えてきた。

「最近環境問題が取り上げられる機会も増え、大いにありがたいことだと思う反面、そのとらえ方が浅いように思う。」川下さんはそう話す。例えばマイ箸運動。根底にある環境問題を正しく理解せず、表面だけをブームのようにファッションのように伝える。「日本人が使用する割り箸は、なんと年間250億膳強ですよ！そのうち国産の間伐材原料のは2%で、98%が輸入と言われている。そしてそのうちの99%が中国産で、その原料は間伐材ではなく、日本に割り箸を輸出するための木をわざわざ切り倒し使う。そのため中国の森はどんどん少なくなっている。その現状を知らねばならない。マイ箸運動の根底にある環境問題を正しく理解しなければ！」だから、“マイ箸づくりの講師をするとき環境問題を語り、環境問題を発するとき、その根底にあるものを伝えることが重要なこと！”川下さんは強調する。

四万十川は“環境問題の象徴”

「四万十川は、ボクにとっては“環境問題の象徴”なのです。例えば世界に目を向ければ進行する環境破壊や核の問題がある。しかし、それでもまだ地球は青いように、四万十川も自らが持つ力で土俵際ギリギリのところまで踏みとどまっている。だから、いま自分たちの責任として、この川を、地球環境を、“再生”をしないとイケないのだと思うのです。」

誰のせいでもなく、環境破壊は人間がやってしまったことなのだ。

「最近よく言われる言葉に“環境に優しい”とか“地球を守る”とかありますが、ボクに言わせれば、その“上から目線”がおかしいと思うんですよ。地球は人類だけのものじゃない。僕ら人間も地球で暮らさせてもらっている一生命体に他ならない。だからボクはこの地球に暮らす一住人として、“環境に正しく”接していきたい！と思うんですね。」

日焼けした笑顔で、人の目をまっすぐ見て話す川下さんの視線の先には、“正しい地球環境”の未来像が描かれているようだ。

ところで、今年の夏はとてつもなく暑い！けれども私は、久しぶりに出会った“熱い想いを持つ人”に、妙に心をすがるがしくさせられ、涼やかな気持ちで帰路についた。また一人、四万十川を介して、ステキな人に出会うことができたと思いながら。



上:サルトリイバラ 下:“柏”餅(シバ餅)